



TITLE:

# プレハーノフのロシア資本主義論 (三)

AUTHOR(S):

田中, 真晴

---

CITATION:

田中, 真晴. プレハーノフのロシア資本主義論(三). 経済論叢 1963, 91(3): 182-204

ISSUE DATE:

1963-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/132936>

RIGHT:

# 經濟論叢

第九十一卷 第三號

---

故 汐見三郎博士遺影

オーベル・シュレージエン

製鉄業の再編過程……………大 野 英 二 1

プレハーノフの

ロシア資本主義論(三)……………田 中 真 晴 26

セルデン特許と

Electric Vehicle Co. ……………岡 田 賢 一 49

故 汐見三郎博士略歴・主要著書論文目録……………61

追憶文(中谷 実・柏井象雄・田杉 競)

---

昭和三十八年三月

京都大學經濟學會

## プレハーノフのロシア資本主義論(三)

田 中 真 晴

### 五

プレハーノフは、ロシア資本主義没落論の第一命題・市場不足論の批判において、ロシア資本主義の現在位置を、リズト的保護関税を要求する段階にまで産業資本(製造工業)が發展し、かつフランス大革命の前夜になぞらえるような、資本主義的發展と絶対主義との矛盾が露呈されつつある時期として把握した<sup>1)</sup>。かれはロシア資本主義没落論の第二、第三、第四命題の批判においては、そのような比較史的展望を前提として、ロシアの経済的現実に対するヨリ具体的な分析をおこなっている。

ロシア資本主義没落論の第二命題は、賃労働者数一定論と名付けられるべきものである。チホミーロフはヴォロンツォフに拠っている、ロシアでは「一億の人口のうちで、資本によって結合されている労働者は八〇万人にすぎない。」<sup>2)</sup>しかもこの比率的にほとんどネグリジブルといつてさしつかえない労働者数が「増加しないで、おそらくは同じ数字を示しつつづけている」と。「資本によって結合されている労働者」というのはあいまいな表現であるが、ヴォロンツォフーチホミーロフはこの言葉を、上場およびマニファクチュア労働者の意味に使っているようであ

り、かれらは右の言明によって、ロシア資本主義がロシアの経済生活全体のなかの一角に限界づけられており、その限界を越えるような発展傾向を示していないことを云おうとするのである。<sup>3)</sup>

賃労働者数一定論に対してブレハーノフは、ヴォロンツォフ・チホミロフが利用している統計に信憑性がないことをつき、ついで統計数字以外の資料から、ロシア工業が発展し賃労働者数が増大しつつあることを論結している。統計の信憑性および利用方法についてのかれの議論はかなりこまかい論点をふくんでいるが、大略はつぎのとおりである。(1) 一八六六年以前の統計は基礎が薄弱で信頼できない。一八四〇—五〇年代の賃労働者数と一八六六年のそれとを比較して賃労働者数は増加していないという結論を出すのは無意味である。(2) 中央統計委員会編の一八六六年以降の統計はヨリ信憑度のたかいものではあるが、醸造業と鉱山業の労働者をふくんでいない。それを加えると賃労働者数は一八八〇年において約一〇〇万である。(3) しかしこの数字もじつは実態からかなり遠いといわねばならない。それはひとつには、統計の編著者たち自身も認めているように、記載洩れの小さい製造所が多数に存在するらしいこと、<sup>4)</sup> ふたつには、工場労働者数が工場主の申告にもとづいていることによる。このあたりの点についていうと、工場主は一般に、課税に対するおそれから生産額や労働者数をじつさいよりも過少に申告する。じつさい工場主たち自身が「警官がしらべにやってくる。そうするとわれわれは秘書に昨年どおりに書いておけと云う。警官はそれを持って帰る。毎年同じことがくりかえされて十年経っても変らない。ところが工場の生産額も労働者数もまったく変化してしまっている」と告白している。<sup>5)</sup> だからエリスマンのように「労働者の実数は申告数の二倍だ」(Tarne: crp. 236)という推定もある。このようなわけで、総括的な統計から工鉱業プロレタリアートの正確な数とその変化を知ることではできないとブレハーノフは結論する。

事実われわれの知るところによれば、『われわれの相違』の執筆時点においてはロシアの工業関係の統計は貧しかった。ブレハーノフの右の議論は、統計の偽瞞性の暴露におわつていて統計の批判の利用にまでは進んでいない点が物足りなく思われるが、それは当時の工業関係統計の実情からやむをえなかつたといわれねばなるまい。<sup>(6)</sup>

さて、総括的な統計的析出を断念したブレハーノフは、繊維工業の中心地であるモスクワ県の、調査のゆきとどいた郡単位の統計報告<sup>(8)</sup>に拠つて、七〇年代に創設された工場（第一位は織物工場）が多数にのぼることを紹介し、さらに「現在（一八八〇年）多くの新しい工場が設立されつつあり、また既存工場の拡張がすすんでいる」(Там же, стр. 230) こと、overenka (明るく小部屋) と呼ばれる仕事場での手織機十台規模のものうちから、力織機をそなえる工場への上昇がおこなわれつつあることなどを紹介し、さきに引用した工場主たちの告白とあわせ、またウラルの金属工業に関する報告をも引用して、ロシアにおける工場制工業（中心は繊維工業）の発展とそれに雇われる賃労働者の増大はあきらかな事実であると結論している。

工場の発展とそれに雇傭される賃労働者が増大しつつあることは疑いないとして、つぎに問題になるのは、いわゆるクスターリ工業<sup>(9)</sup>である。これはロシア資本主義没落論の第三命題たるクスターリ工業＝人民的生産形態論に係している。ヴォロンツォフ・チホミロフが賃労働者数一定論によつてロシア資本主義の局限性を論証できると考えたのは、工場およびマニュファクチュアの労働者以外のものは資本の支配を受けていないという想定とうらはをなしていた。つまり、クスターリ工業と呼ばれている広汎な小生産は自立的で資本主義の圏外にある、というわけである。ブレハーノフはこれに対して、資本の支配を受けている生産者（労働者）の数は、「本来的な工場労働者」のそれをはるかに上廻つており、「クスターリの大部分は多かれ少なかれ資本に従属してゐる」(Там же,

срп. 234) ことを証明しようとする。そのためにかれが利用している資料は、プルガーヴィンのクスターリ研究書、『農村経済の現状調査のための勅命委員会の報告書』、シュトッケンベルクの『統計著作集』、『ロシア帝国統計年鑑』その他である。<sup>10)</sup> 引例の県別についてみるとモスクワ、ヴラジミール、ヤロスラヴリ、コストロマなど、いわゆるモスクワ工業地帯の諸県がほとんど全部を占めており、業種別では綿織物、毛織物、亜麻織物、然組、りぼん精糖、染料、鍛冶、製靴等であるが中心はやはり織物業である。引例は多数にのぼるが、そこに描出されているクスターリの自立性の喪失（資本への包摂）過程は、われわれがレーニンの労作によって知っていると看做されるから、とくに典型的な二つの例だけを書きつけておこう。

引例(1) ヴラジミール県ボクロフスク郡の綿織物。クスターリの家にある手織機は計四、九〇三台、他方工場には計三、二〇〇台の力織機がある。両者の中間には移行形態とみるべき、手織機六一〇台から最大は百台以上を集中する作業場（マニュファクチュア）があり、計二、三三〇台が算えられる。これらのマニュファクチュアは工場に転化しつつあるが、労働条件はマニュファクチュアにおいて最もわるい。しかし自分の家に織機をもっているクスターリもけつして自立的ではなく、買占め人等に従属しているのであって、ほんとうに自立しているクスターリは郡下で五〇を越えない。同県ユリエフスク郡においては綿織物の自立的クスターリは全滅した。「買占人」や「親方」に従属しているクスターリ営業は大規模生産の家内制度 *домашнее хозяйство крупного производителя* と呼ばれ、これが綿織物においてはいまなお支配的であるところが多いが、この生産形態（問屋制家内工業と考えられる）においては、生産者は「実質上の賃労働者」に転化しつつあるかまたは転化しおえている。同時にこの生産形態は力織機をもつ生産力的に優位な工場制生産によって駆逐される傾向にある。

引例(2) カルーガ県のリボンと撚絲生産。ここではモスクワの工場主がカルーガの「親方」に経絲を前貸しし、「親方」はそれを自分の仕事場で加工するかまたはクスターリ(農民)に分配してアルシン当りいくらという支払方法で加工させ、それを集めてモスクワの工場主に送っている。<sup>11)</sup>

ブレハーノフが紹介している諸例のうちには、クスターリの両極分解過程、その上層分解部分が親方→マニユフ→クチュア経営者→工場主という経路を示しているものと、クスターリが買占人によって全体的に支配されているものとがあるが、それらの型を区別することは問題になっていない。ここでのブレハーノフの主張は、本来的な工場労働者の周囲に「実質上の賃労働者」ないしは半プロレタリアートの大群が存在していること、後者も資本に従属している点では前者と異ならず、ただ発展程度のヨリ低い資本に従属しているにすぎないことである。

クスターリ工業についていまひとつ問題となるのは、元来それは農民の副業としてあったこと、農耕と営業の結合がそこにみられることである。しかしブレハーノフは、「現在までの状態では、わが国のクスターリはなお農民である」けれども、「クスターリ営業は多くの地方において副業としての地位から農民の主要な所得源泉に転化しつつある」(Тур. эк. стp. 222)とし、とくに工業地帯においてはクスターリ農民の農耕放棄(脱農民過程)がすすんでおり、それと表裏をなして分与地の不均等配分・土地集中がみられるという。

さてそれでは、ロシアの経済は資本主義化のどのような段階にあるのであろうか。ブレハーノフはさきに述べたように、リスト的保護関税を要求するほどの程度に製造工業(産業資本)が発展している段階、フランス大革命前になぞらえうるような、資本主義化と絶対主義との矛盾の露呈の段階として、ロシアの現在位置を把握していた。しかしそれはロシアの現在の経済構造そのものの特徴づけではない。経済構造の特徴づけ、ということは、本書の、

レ、ハ、ノ、フ、の、問、題、意、識、に、お、い、て、は、資、本、主、義、化、の、段、階、規、定、と、い、う、こ、と、に、帰、着、す、る、の、で、あ、る、が、か、れ、は、そ、の、鍵、を、  
『資本論』第一部二四章五節にみえる本来的マニユファクチュア時代についての叙述に求めた。この箇所はわが国では経済史家がしばしば言及し、よく知られているが、それを現状分析に適用した最初のひとがブレハーノフであり、またそれがブレハーノフのロシア資本主義分析のかなめである意味から、その一部をしるしておく。

「……以前の自営農民の収奪と彼らの生産手段からの分離と並んで、農村副業の破壊が、マニユファクチュアと農業との分離過程が、進行する。」

しかし本来のマニユファクチュア時代には、根本的な変化は何も現れない。人々の記憶するように、この時代は国民的生産をきわめて断片的に征服するだけで、つねに都市の手工業と家内的・農村的副業とを広い背景としてこれに支えられているのである。この時代は、これらのものがある種の形態、特殊の事業部門、いくつかの点では破壊するにしても、よそでは再び同じものを呼び起す、というのは、この時代は原料の加工のためにある一定の程度まではこれらのものを必要とするからである。それゆえこの時代は、耕作を副業として営み、生産物をマニユファクチュアに売る——直接にかまたは商人の手を経て——ための工業的労働を本業とする小農民の新たな一階段を生み出すのである。……大工業がはじめて機械によって、資本主義的農業の恒常的な基礎を与え、巨大な数の農民を徹底的に収奪し、家内的・農村的工業の根——紡績と織物——を引き抜いて、農業と農村工業との分離を完成するのである。したがってまた、大工業がはじめて産業資本のために国内市場の全体を征服するのである。」（『資本論』第一部アドラツキー版七八八—八九頁。ブレハーノフの引用はマルクスの原文とすこし異っている）

ブレハーノフは、ロシアの経済的現実マルクスが述べているところにまさしく符合すると考えた。かれは、さきにみたように、クスターリ工業の駆逐を傾向的現象として把握したのではあるが、それと同時にクスターリ工業が広汎に存在し、部分的にはむしろ再生拡大さえしつつあることを、事実として認めないわけにはいかなかった。<sup>12)</sup>



だがそうしたことが、本来的マニエファクチュアの時期といわれる資本主義の早期の段階において法則的にあらわれる現象であつて、けつして特殊ロシア的現象ではないこと、このことははやあきらかである。また、現在のロシアにおいて機械制工業へのすみやかな移行をはばんでいる主たる要因のひとつは、クスターリ工業の低賃賃制であるが、その低賃賃制はクスターリ工業の担い手たる農民がなお農耕からの収入をもっていることに基いており、かれらが工業的労働に専業化してゆくにつれて、労賃は「かの有名な労働者の最低生活費の水準」(Tar. zec. ctp. 246)まで上昇してゆく<sup>13)</sup>。そして労賃の上昇は機械制への移行を促進するはずである。このこともまた『資本論』の他の個所に一般的法則として述べられているところである。<sup>14)</sup>——ブレハーノフはこのように、ロシア経済の特徴的現象をマニエ段階一般の特徴として説明するのであるが、ロシアの現段階をマニエ段階そのものと考えているのかというと、そうではなくてむしろそれよりもすこし進んだもの、言葉を補うならば、その先端部分において機械制工業への移行が開始されつつあるようなマニエ段階、あるいはマニエから機械制工業への移行の初期階梯、産業革命の始期として把握していたというべきである。<sup>15)</sup>そのことはたとえばつぎの言葉から読みとれるであろう。「紡績と綿織物は、知られているように、現在の資本主義的工業の最先端部門である。そのため、他の生産部門においてはいま始つたばかりの、あるいはまだ始つてもいない現象が、ここではほとんど完結している。それと同時に、ヨリ先進的な産業部門において生じた現象は、その他の産業部門に關して予言的な性質をもつとみられうるし、そのようにみられねばならない。先進的産業部門において昨日起つたことは、たとえ明日にはなくとも近い将来に一般的におこるであろう」(Tar. zec. ctp. 246)云々。

ブレハーノフは右のように述べたあと、「ロシア資本主義の成功」を示す事例として、全露博覧会(一八八二年)

に出品された製品にうかがわれるロシア工業の実力、鉄道と信用制度の整備、外国資本の流入、ロシアのブルジョア経済学者および外国人の観察などを紹介し、「製造工業の分野においては、わが国の明日といわず今日が、資本主義のものである」(Там же, стр. 241)と結んでゐる。

(1) 「ブレハーノフのロシア資本主義論」(『経済論叢』八九巻五号)「ブレハーノフのロシア資本主義論」(『同九〇巻四号』を参照。本稿はその統稿である。

(2) Плеханов, Г. В. Избранные философские произведения, т. 1, стр. 225. ロシア資本主義没落論の第二命題は、『われわれの相違』第二章「ロシアにおける資本主義」の(一)国内市場の末尾以降において紹介せられ、(二)労働者数において批判されている。第三命題は(三)クスターリ以下の諸節でとりあげられている。

(3) ヴォロンツォフは、資本主義は一般にその一定の発展段階に達すると「労働者数が減少する。すなわち生産は広さにおいてではなく深さにおいて発展する」とし、ロシアにおいても——ロシア資本主義の幼折を説くかれの主張と矛盾することであるが——この法則が妥当しているというのである。かれはその証拠を《Вестник Европы》誌十号(一八七〇年)掲載の論文 Вентков, В. И. Русская промышленность и ее нужды. によつて一七六一—一八六六年の労働者数および一人当り生産額の表を求めた。См. Там же, стр. 226.

ロシアの賃労働者八〇万人というのは、その表とは別の資料 Военно-Статистический Сводник, вып. IV, 1871, стр. 322-25. に拠り、ポーランドとフィンランドを除くヨーロッパ・ロシアの一八六六年現在の製造工業の(工場)労働者数である。「賃労働者八〇万人」というのはかなり流布したものであるらしく、ブレハーノフがのちに紹介・批判した Westlander, A., Rußland vor einem Regime-Wechsel, 1894. の数字を採用してゐる。Vgl. Plechanov, G., Rußland vor einem Regime-Wechsel, „Neue Zeit“ Jg. 13. Bd. 1, S. 270. ヴォロンツォフ自身は一八九六年には「賃労働者一〇〇—一五〇万人」に改訂した。のちにレーニンは『ロシアにおける資本主義の発展』の総括部においてこれを批判し、分与地をもつ賃労働者をもふくめて「総計一、〇〇〇万人の賃労働者……(そのうち)七五〇万人の成年男子の賃労働者」(『レーニン全集』六二六頁)を析出した。

- (4) Военно-Статистический Сводник の著者たち自身が、一八七〇年の博覧会の目録およびチミリヤエフの地図には右の統計集に載っていない多くの製造所がある、と註記している。さらにそのチミリヤエフの地図自体も「多くの工場主の言による」となお真実から遠い」(Там же стр. 223)
  - (5) Там же, стр. 231. これは「第一回全露工場主会議」の第三部会の速記録に記された大工場主「С. С. Морозов」の言葉である。
  - (6) «Русского Россия統計史概説によれば、一八七〇—一八八〇年代の全国的工業統計は、関係各省によってのおの独立に作成され、「工場」の範囲の規定についても、「工場労働者」の規定についてもばらばらであった。ただし一八七五年以降はペテルブルクの К. Э. Блехн、モスクワの В. Г. Михайловский などの努力によって、都市およびゼムストヴォの統計課が工業統計の問題にとりくみはじめたが、それはタスマーリ營業のさかんなモスクワ、ヴラジミールなどの諸県に限られていた。第一回國勢調査は一八九七年、全国的な統一の工業調査は В. Е. Вагзар を責任者として一九〇〇年にはじめておこなわれた(«Статистические сведения о фабриках и заводах, не обложенных акцизом за 1900»). Голубов, А. И. История отечественной статистики, 1957, стр. 27, 30-33. レーニンも「八〇年代のなかばまで、わが国の工場統計には、工場の概念を、比較的大きな工業経営に限定するような規定や準則はなにもなかった。〈工場〉統計のなかには、あらゆる工業(および手工業)経営がはいりこんでいたのであって、そのため、当然のことながら、資料には最大の混乱がひきおこされていた」(「わが国の工場統計の問題によせて」『レーニン全集』④八頁)と指摘している。工場労働者の実数がいかに把握しにくいものであったかは、別の面からは、ツガン・バラノフスキーが一八六〇—一八九六年について、数種の資料をよせあわせても結局は実数そのものの挙示は不可能でただ「変化の傾向」のみに自信をもつ表を作成しえた、と述べていることから知られる。Vgl. Tugan-Baranowski, Geschichte der russischen Fabrik, 1900, S. 378, 379-81. Anm. および巻末の付表を参照。
- なお、本節および次節の叙述に関して、つぎの点を付記しておく。一九世紀後半のロシアの統計には、内務省中央統計委員会編の官庁行政統計と各省別統計のほかに、ゼムストヴォ統計があった。それは一八六九—一七一年ごろに数県のゼムストヴォ内にあらわれた統計調査への志向からうまれた。一八七五年にはモスクワ県に В. К. Грозв の指導のもとに統計課が置かれ、一八八六年ごろまでにほとんどすべてのゼムストヴォがそれになつた。モスクワ県ゼムストヴォ統計は農民の経済状態を各経営体についての調査表にもとづいてしらべあげている点で、チュルニゴフ県のそれは土地調査の点で、それぞれ指導的

であった。ゼムストヴォ統計は、政府統計とは異って専門家（ただしその多くはナロードニキの理念の所有者）の手によって第一次資料が集められ、個々の資料がいちじるしく整っており、かつ詳細に加工されている点で、当時のヨーロッパに類をみないものをもっていた。См. Голубов, там же. стр. 23, 51-54, 79-81. プレハーンフは後段のクスターリおよび共同体の分析において、ゼムストヴォ統計の早期刊行物を利用している。

(7) ただしプレハーンフが、経済学的意味での、「工場」概念を基準にして統計資料の「工場」概念を批判するという大切な作業——統計の批判的利用のための基礎作業——を怠っているのは、責めらるべきである。

(8) Сборник статистических сведений по Московской губ. Отдел санитарной статистики, т. III. Вып. I. Эрисман, «Исследование фабричных заведений Кинского уезда, 1881.

(9) Кустарь-ремесльとは、一般に下層身分の営業者を指し、クスターリ営業（または工業）とは、ふつうには農民の營業（工業）をいう。レーニンがこの伝統的用語を「家内工業および手工工業から非常に大きなマニュファクチュアにおける賃労働にいたるまでの、ありとあらゆる工業形態」をふくむ「科学的研究にとつて絶対に不適当な用語」として批判したことは知られている。『レーニン全集②』三三五頁以下、『同③』四六七—七二頁を参照。プレハーンフの以下のクスターリ論は、クスターリのなかから工業の諸形態を検出するまでにはいたっていないが、レーニンのクスターリ論に対する先駆的分析である。

(10) Путилин, В. С., Кустарь на выставке 1882 года, 1882. Доклад высочайше учрежденной комиссии для исследования нынешнего положения сельского хозяйства. Шугенбергу, Н. Ф. Статистические труды Шугенберга, статья X. Статистический Временник Российской Империи, выпуск III. 1872. せよら⑧に準示のみ。

(11) その他同様の例として、ヴラジミール県アレクサンドロフスク郡のある地方では毛織物クスターリー、六九六人のうち、自立的クスターリは九%にすぎない。モスクワ県の織物クスターリはほとんど自立性をうしなっている。ヤロスラヴリ県では一八五〇年代に亜麻織物の自立的クスターリの分解がはじまっている。コストロマ県ではかつては亜麻織物が農民の家内仕事であったが、いまや手織りは半減以下となり、農民はむしろ工場で働くことを望んでいる。ニジネゴロド県の金属加工業、ノヴゴロド県の鍛冶業ではまだ工場との競争はないが、クスターリ間の分解と商人への従属がみられる等々（Там же. стр. 234-42）。  
(12) たとえば、更紗マニュファクチュアの発展は、織物の家内労働の展開を随伴している。織物においても、整理過程のみを、

マニユ経営者が自己の作業場でおこなわせ、織布過程を「親方」にゆだね、「親方」はその一部をまたクスターリに配分し、かくして小クスターリがかえって増加している地方もある。また大工場の「臨時工」は実質上、大工場に従属する手工業者であるなど(Tam me, ctp. 245. number)。ブレハーノフは「多くの部門の小クスターリ工業をへ誕生させる」もしくはすくなくともその一時的な生存を許すこの過程こそが、ヴォロンツォフおよびかれの同類たちに、わが国には「クスターリ營業の資本主義化」というものはないのだということの証明を、外見的には成功させる可能性を与えているのである」(Tam me ctp. 246)という。つまりブレハーノフはヴォロンツォフの見解の實在的地盤はマニユファクチュア期の経済的特徴にあると説明した。

(13) 「かの有名な最低生活費」という言葉によって考えられているのはラッサールの労賃論(生存費説、賃金鉄則)である。しかしこのことはブレハーノフのマルクス理解、とくにロシア資本主義分析に大きな影響は与えていない。

(14) 『資本論』第一部十三章「機械と大工業」八節大工業によるマニユファクチュア、手工業および家内労働の駆逐」(e)「近代のマニユファクチュアおよび家内労働の大工業への移行」とくにアドラツキー版四九四頁を参照。機械制大工業がはじめて農工分離を完成するという命題と、農工の未分離状態が低賃賃を支え、それが機械の採用を阻止しているという命題とは、一見排反的であるが、ブレハーノフは、商品生産の浸透→クスターリの非立自化・両極分解・農耕分離過程の進行→労賃の上昇→機械制大工業への移行の容易化という過程をこゝでは考えている。他のところでは、機械制工業がクスターリを破滅させ農工分離を強行してゆく過程の面を考えている。

(15) ただし、前述のところからも知られるように、ブレハーノフはマニユファクチュアの形態検出を意識的にはおこなっていない。かれは前著『社会主義と政治闘争』においてはロシアの現段階を原始的蓄積過程としている。「ロシアの資本蓄積過程は(ナロードニキによって)西欧の資本主義的生産の時期と対照せられた」(Tam me, ctp. 67)引用文の資本蓄積過程は文脈から考えて原蓄過程の意味である。もちろん、原蓄期とマニユ期とは矛盾するものではなく、あいおおう。『われわれの相違』においては、原蓄過程という概念は使われていない。因みにかれが当時信頼すべき文献とみなしていたダニエリソン論文「改革後のわが国の社会経済概況」(一八八〇年)は、前稿「一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説」で触れたように、政府の諸政策を原蓄の政策として規定し、批判していた。

「*Тяжелая* から機械制工業へ」は「産業革命」に他ならぬこと勿論であるが、産業革命という概念は使用されてこなう。Toybee,

A., Lectures on the industrial revolution of England. の初版は一八八四年、ブレハーノフが本書を執筆していた年であった。  
(4) ブレハーノフが鉄道と信用制度にすこししか触れていないのは、前註のダニエリソン論文が、まさしくそこに重点を置いて  
叙述しているために、既知のこととして略したためであろう。

## 六

機械制工業への移行をはじめつつあるマニユ段階、あるいはマニユから機械制工業への移行の始期という段階規定は、農民の副業についての、間接的には農業についての論及をもふくんでいるけれども、直接には工業の資本主義化にかかわっており、それについての段階規定である。そこでつぎに問題になるのは農業部門である。しかも農業あるいは農村こそは、ヴォロンツォフたちロシア資本主義没落論者たちがもつとも重視する分野であった。ブレハーノフの要約にしたがえばこれらの主張はこうである。——「農業はわが国の社会経済の主たる、唯一の基礎である。」しかるに「農業における資本主義の発展、〈私的企業資本〉の農業への適用は、共同体 *община* によって阻まれている。共同体こそは資本主義に対する不壊の防壁であったし、いまもそうである。わが国においては大農経営は小農経営を駆逐しないだけでなく、逆にますます後者に道をゆずりつつある……」<sup>1)</sup>と。この主張を没落論の第四命題・共同体不変論と名付けておこう。

ブレハーノフにしても、現在のロシア農業が資本主義化しおわっているなどというのでは勿論ない。農業の資本主義化は工業のそれよりも遅れている。だがそれはロシアだけのことではない。「農業はほとんど何処においても、国民の生産のもつともおくれた分野であって、資本主義がこの部門の征服に着手したのは、強固な足場を工業に築いたあとであった。」<sup>2)</sup>したがって、機械制工業の全機構的確立以前の段階にある現在のロシアにおいて、農業がい

まだ資本主義化していないのは当然のことであって、究明さるべき問題は、ロシアの農村において進行しつつある過程の性格如何である。かれはこのように前置きして、みずから設定したそのテーマに向うのであるが、ここであらじめ注意すべきことの一つは、かれのロシア農業の分析とは具体的には共同体＝農民経済の分析であって、地主経済の側を捨象してつること、二つには、そのさいかれの批判のまとは右に共同体不変論と名づけた思想であるが、そのなかでも「共同体は資本主義に対する不壊の防壁」という点が批判の焦点となつてゐることである。<sup>3)</sup> このような問題意識と限定のもとにかれは、七つの節にわけて論じてゐるが、わたくしはそれを、(1) 共同体一般

(2) ロシアの共同体の現状 (3) ロシアの共同体の将来の三点に整理して紹介しよう。<sup>4)</sup>

(1) 共同体一般 ブレハーノフは『資本論』第一部の共同体への言及とコヴァレフスキーの著書に拠つてつぎのように考える。<sup>5)</sup>

およそ農村共同体——ロシアの共同体はそのひとつである——というものは、「原始共產制の解体の諸段階の一つ」であつて、不動産(＝土地)の共有制と動産の私有制の結合を特徴としてゐる。このような農村共同体の存立基礎は現物経済である。「農村共同体は現物経済の諸条件から逸脱しないかぎりには、疑いもなく生命力を示す。」(Tam zhe. str. 256) マルクスはインドの共同体に関して「……これらの自足的共同体の簡単な生産有機体は、アジア的諸國家の不斷の興亡や王朝のたえざる交替と著しい対照をなすアジア的諸社會の不変性の秘密を解く鍵を与える」(『資本論』第一部アドラッキエ版三七一頁)と指摘してゐるが、それは共同体が現物経済的再生産を基軸にしていたからである。

しかしながら「貨幣経済と商品生産の發展は共同体的土地所有をすこしづつ掘りくずしてゆく。」(Tam zhe. str.

59) すなわち農村共同体が貨幣経済のなかにまきこまれてゆくにつれて、共同体の構成単位たる家父長制的農家の伝統的な生活形態が破壊され、かつ、農家間の経済的不平等が増大してゆく。この過程に強力な作用をおよぼすのが国家である。国家はみずからの財政上の必要から、従来の現物形態での貢租を貨幣形態に変え、貢租(課税)負担者たる共同体農民はそれによって生産物の商品化・貨幣獲得のための副業を促進せしめられる。「財産と権利と義務に關してかつては平等であつた共同体の成員は……二つの層に分裂する。あるものは都市ブルジョアジーの方へひきよせられ、かれらと混じりあつてひとつの搾取者階級を形成する。農村共同体のすべての土地は次第にこの特権階級の手に集中される。いまひとつの層は、一部は土地を喪失し、共同体から追い出されて、労働力の売手となり、他の部分は……たやすく搾取される新しい共同体賤民を形成する。」(Tam me. ctp. 238) 共同体は一挙には崩壊しない。外面的には同一のままで、共同体は次第にその経済的構造を変えてゆき、それが一定のところまで進むと、法制的に破壊されるのである。共同体は共同体農民のなかの貧農(零落農)にとつても富農にとつても極端となる。とくに新興の商工ブルジョアジー(その一部は以前の共同体農民の出身である)は国家の経済政策の動向を左右する力をもつようになるが、かれらは土地の商品化を要求し、かつ自由なプロレタリアートを必要とするため、共同体的土地所有に敵意をもち、のちにはその廃止を企てる。これが共同体の解体の一般的図式である。

(2) ロシアの共同体の現状   ロシアの共同体が経てきた過程は、まさしく右の一般的図式にびたりとあてはまる。

共同体(＝ロシアの共同体。以下同じ)が安定的な存在でありえたのは、現物経済が基調をなしていた時代すなわち一八六一年の改革以前であつた。その時代にはいかなる政治的事件も、かのピョートルの「啓蒙」「西欧化」さ



えも、現物経済的基調を変革しえず、したがって共同体の生存をおびやかしはしなかった。「もしもロシアが西欧の生活の経済的および政治的影響から隔離されていたとするならば、歴史がロシアの政治的組織の経済的基礎をいつの日に終局的に葬り去るかを予見するのは難しかったであろう。だが国際的な諸関係の影響は……商品生産・貨幣経済の発展を促進した。」六一年の改革は「新しい経済的潮流に対する不可避免的な譲歩であり、かつそれ自体、その潮流に新しい力を与えた。」(Tam arc. crp. 259) 六一年改革を境としてロシアは商品生産・貨幣経済を基調とするようになった。すくなくともその方向へ急速に展開した。そのため共同体の経済的内容の変質過程も急速に進行して現在にいたっている、とブレハーノフは解釈する。

それではロシアの共同体の現状は具体的にはどのようなものであるのか。ブレハーノフは、作家や調査家(多くはナロードニキ的傾向の)の農村ルポルタージュと、統計資料とを駆使して、つぎのような事実を報告する。

(i) ナロードニキの作家ズラトヴラツキーの観察によれば、一方には二つの窓をもった、藁ぶき屋根の貧しい家の群、他方にはスレートぶきの立派なクラークの家、さらに地に這いつくばったような、人の住むところとも見えぬ家の列が、ひとつの村のなかに共在し、いちじるしい対照をなしているのが、近來の傾向である。一方の側には、「自分の分与地は一人分しかないが、経営能力を失った隣人たちの三人分、四人分、五人分さえもの分与地を耕作してゐる経営上手の農民」(Tam arc. crp. 260)があり、他方には黒く奴 *vepnot* とか貧乏人 *denior* と呼ばれる零落農があつて、かれらはかれらの分与地の借手である富農に雇傭されるか、もしくは村から逐電してゆく。たしかに「労働と経済的平等の原理を代表する古い村」がまだ存在してはいるけれども、右のような「二つの顔をそなえた新しい型の村」が増えてきている。

(ii) オルローフの伝えるところによれば、共同体を圧迫している直接の最大要因は国家の苛酷な課税である。分与地からの収益よりも分与地に対する諸掛りのほうが上廻っているところが多い。このことはダニエリソン、ブルガーヴィンも指摘し、統計資料にもあらわれている。<sup>10)</sup> そのため、経営能力を失った零落農が都市へ出稼ぎにゆくばあい、かれは分与地の借手に逆に支払いをしなければならぬ。共同体は課税に対して連帯責任を負っているからである。かれらにとって共同体は、自由なプロレタリアートになることをも妨げる邪魔ものになっている。

(iii) 経営能力を喪失した農民がどの程度の数にのぼるかを示唆するのは一八八二年の馬匹調査であつて、それによれば、ウイスツラ河およびバルト海沿岸地方を除くロシアの共同体農家総数九、〇七九、〇二四戸のうち二、四三七、五五五戸が馬一頭も所有していない。馬を所有しない農家には独立の農業経営は不可能である。すなわちロシアの共同体農家総数の約四分の一は半プロレタリア的状态にあると推定される。馬を喪失した農家が二〇—二五パーセントにのぼることは、比較的富裕といわれるタンボフ県の諸郡についてのゼムストヴォ統計についてもみられる。<sup>12)</sup>

耕作放棄面積および耕作放棄戸数についての総括的統計はないが、地方的統計はそれらの増加傾向を示している。<sup>13)</sup> モスクワ県ポドルスク郡では一八六九年には三三、八〇二人分の分与地のうち一、七五〇人分すなわち五パーセントが耕作放棄されていたのが、一八七七年には二二・七パーセントに増大した。自己の分与地を耕作しない戸数の比率はその八年間に、六・九パーセントから一八パーセントに上昇している。これは同郡の平均値であつて、同郡内の地方的不均等性はきわめていちじるしい。

(3) ロシアの共同体の将来　ロシアの共同体の現状は右のとおりである。ところで実は、多くのナロードニキたち—ヴォロンツォフをもふくめて—も、ロシアの共同体の現状がそのまま理想的な状態などと考えているので

はない。かれらは共同体の現状が不安定化し危機に直面していることを認めている。<sup>14)</sup>だが共同体そのもの *община* *an und für sich* に対する信仰をかれらは捨てないのであって、「重い課税」と「土地不足」という抑圧がとり去られるならば、現在の共同体はそのあるべき姿に、すなわち本来の共同体になりうると思い、政府にそのための政策をとることを訴えるのである。

ブレハーノフは、重税と土地不足が共同体を圧迫し零落農の大群をうみ出しつつあることについては異議はない。しかしながら、かりに重税と土地不足がなかったとするならばどうなるか<sup>15)</sup>という点については、ノロードニヤの通念とはまったく逆の結論を出す。かれの論証はつぎのとおりである。

現在多くのところにおいては分与地からの収益が課税負担額に及ばないのであるが、収益が課税負担額を上廻り、また土地がわりあいに多い地方もある。このような比較的恵まれた条件の地方の共同体においては、たしかに零落農（経営能力喪失農）はわるい条件のところにくらべてすくない。しかし共同体は昔日の平等性の原理を恢復するどころか、解体への傾向をかえってつよく示している。すなわち、モスクワ県・リヤザン県その他の資料によれば、共同体における土地の割りかえ（分与地の再配分）の期限は、恵まれた条件の共同体であればあるほど、延長される傾向がはっきりと認められ、ときには「根本的な割りかえは一五—二〇年あるいはそれ以上も」おこなわれなくなっている。このようであるのは、好条件にある共同体では、耕作にヨリ多くの費用をかけ、とくに施肥をよくおこなうのであるが、施肥の結果は当年だけでなくその後にも残るから、施肥した農民はその分与地が翌年は他人の保有に移ることを好まないことによる。ただし、そのばあいもしも共同体成員たる農家がみな平等な資力をもち平等な施肥をするならば、割りかえによる得失はないはずであるが、共同体は貨幣・商品経済のなかにすでにまき

こまれており、農家間の階層的分化がすすんでいるのが現実である。したがって、ヨリ綿密な施肥をする富農はその分与地を貧農のそれと割りかえられることを忌避する。その結果割りかえ期限が長期化する。また、割りかえがおこなわれるばあいには、富農は富農相互のあいだで割りかえをおこなうことになる。富農たちは貧農に対して同盟を結ぶのである。共同体に対する査察があつて、どうしても一般的な割りかえをしなければならぬばあいには、割りかえの前の年には施肥がおこなわれなくなり、土地は荒廢する。これは、土地の共同的所有と経営の私的所有との間の矛盾、同じことであるが土地所有における共產主義的原理と経営の個人主義的原理との間の矛盾にはかならないが、この矛盾は商品・貨幣經濟が浸透するにつれて激化していく。共同体（＝共同体的土地所有）がいまや生産力の發展に対する桎梏となつてゐることは、右の施肥の例のほかに、播種・刈入れ等の時期を同じくする必要のために、耕作方法の革新・新種作物の導入が妨げられており、富農の一部は、共同体的規制からのがれて自由に経営を改善したいと望んでゐることにあらわれてゐる。こうした事實に基いて考えるならば、全ロシアの共同体が、かりに現在の苛酷な課税制度と土地不足という重圧を取りさられたばあい、割りかえ期限の長期化すなわち事實上の分割地的土地所有への移行がいっそう促進されると推論せざるをえない。現在ナロードニキが共同体の救済策として提案してゐる「人民的信用制度」のごときは、富農への融資政策にほかならないのであつて、共同体が富農の共同体になつてゐるように、ナロードニキは実は富農・クラークの代弁者に転落してゐる。そしてこれらの提案する政策は、客觀的效果としてはブルジョア的諸關係を育成し、共同体の解体を促進するにすぎないのである。

いまひとつ、共同体の解体を促進してゐる要因として注目すべきは、いわゆる買戻し操作 *выкупная операция* である。買戻し操作とは、六一年の農民改革において農民の所有地（共同体の所有地、分与地）として確認された

土地を、農民が年賦償還の形で買ひとることであるが、一八八三年一月現在において計一二〇、六二八、二四六デシャチンのうち二〇、三五三、三二七デシャチンすなわちほぼ六分の一だけ買戻しが完了していた。<sup>17)</sup> 買戻しは、そのために必要な貨幣の獲得を農民に強制し、したがって農産物の商品化と副業労働の普及を促進する。すなわち共同体の解体的要因としてはたらく。それだけではない。買戻しは共同体単位でおこなうのが原則であるけれども、実際には各農家別におこなわれているところがあり、そうしたところでは、買戻しのすんだ分与地は事実上その農家の所有とみなされる。買戻しの進行は、買戻し地が事実上の私有地的性格を濃くしてゆくことを伴っている。現在においては、分割地的土地所有へ移行したのはまだ例外的なケースで、大部分は共同的土地所有制度を維持してはいるものの、その経済的内実の変化は共同体的外皮と決定的な衝突をおこす点に向って進んでいる。「農民の大多数は農業をみずからの力で営む可能性を次第に失って、土地も家屋もない階級に転化しつつあり、他方ごくわずかの農民たちは年々財産をふやしている」(Tax. rec. crp. 267)「中位の農民は共同体的土地所有の味方である。しかし阿極の層の農民すなわちもつとも繁栄している層とその逆の層とは、共同体的土地所有を戸別的・相統的土地所有に変える方向に傾いている」(Tax. rec. crp. 265) のである。<sup>18)</sup>

『われわれの相違』におけるロシア資本主義分析の要は以上のとおりである。ロシア社会の現段階は、まず比較史的・国際的視点から、フランス大革命の直前に比定しうるような、絶対主義と資本主義的發展の矛盾の露呈の時期(ブルジョア革命の客観的条件が成熟しつつある時期)、リスト的保護関税を要求するまでに産業資本(工業)が成長しつつある時期として位置づけられた。ついでロシアの現段階の経済構造のなかに立ち入った分析において

は、工業はマニファクチュアから機械制工業への移行の始期にあり、農業は工業のかかる段階に対応して、勿論はまだ資本主義化しきってはいないが、共同体農民の間に醸成されつつあるブルジョア的諸関係はもはやくつがえしえないものであることが示された。「ロシアの資本主義の本流はまだ大きくはない。ロシアでは、労働者に対する雇主の關係が、資本主義社会における資本に対する労働の關係についての一般の觀念に完全に符合しているところは、まだ多くはない。しかしかの本流にむかつて、あらゆる方向から多数の大小さまざまな支流細流があつまりつつあり、それらの水量の合計は老大なものであつて、かの本流がやがて奔湍激流になることは疑いえない」(Там же, стр. 289) ——「ロシアはすでに資本主義の学校に入った」のである。(未完)

(1) Илеханов, Г. В., Избранные философские произведения, т. I, стр. 253. これはブレハーノフによる要約であつて、ナロードニキ相互のあいだで、かなりちがつている。『われわれの相逢』にあらわれているかぎりにおいても、共同体不変論の内容は、ナロードニキ相互のあいだで、かなりちがつている。文字通りの共同体不変論の典型はルサーノフの「……幾世紀の時が流れ、すべてのひとは幸を求め、この世にあるすべてのものがいくたびか流転した(ネタラソフの詩)……という言葉にもかかわらず、ロシアの共同体は変化しなかつたし、変らぬ性格のものである。」という句にみられる。チホミロフは「農民の所有地(共同体の所有地)は約一億二千万デシヤチンある」ということをくりかえし説く。ヴォロンツォフのばあいは、本節後段にみられるように、共同体の危機を認めたうえで農民保護を訴えている。

(2) Там же, стр. 253. この点、前節で引用したマルタスの句の一部「大工業がはじめて機械によつて資本主義的農業の恒常的な基礎を与える」が参照されている。その歴史実例としては、大革命前のフランス農村において支配的なのは資本主義ではなく、分益小作制と、地主からブルジョアに貸し出された土地が再び農民に貸出されるという関係であつたことが、Капен, Н., Крестьяне и крестьянский вопрос во Франции в последние четверти XVIII века, 1879, に掲げて述べられている。

(3) 『われわれの相逢』が地主経済についてまったく触れていないことは二重の意味において注目すべきである。第一に地主経済の抽象とともに、地主・農民間の農奴制的遺制の諸關係が抽象されてしまつてゐる。このことはかれのロシア資本主義論の

性格にかかわる点であつて、続稿において論じるであらう。第二に、ヴォンツォフたちの主張の重要な部分であるところの、大経営(地主経営)と小経営(農民経営)との優劣論——主張者たちの觀念においては「大経営」が資本主義的経営である——に對して、ほとんど無回答におわつてゐる。第三章六節「小土地所有」はこのテーマにすこしく觸れて、地主経営がアメリカとの穀物輸出競争に敗退して凋落したのちに、農民の阿極分解による資本主義化が進行するであらうと述べてゐる。O.M. Fay 氏, стр. 388. これは注目すべき指摘であるが、小農理論批判としては、世紀末以降のレーニン、カウツキーたちの農業理論の水準に及ぶものではない。というよりもむしろ、問題に対する正面からの回答になつてない。大経営と資本主義的経営との同一視の批判という仕事果されてゐないことが致命的欠陥である。

- (4) 『われわれの相違』第三章「資本主義と共同体的土地所有」は (一)資本主義と農業 (二)共同体 (三)わが國の共同体の解体 (四)ナロードニキの理想的共同体 (五)買戻し操作 (六)小土地所有 (七)結論 から成つてゐる。本文(1)共同体一般は(二)を主として(四)の一部を、(2)ロシアの共同体の現状は(三)の一部と(二)を、(3)ロシアの共同体の将来は(四)、(五)を、まとめたものである。(六)については前註参照。

- (5) ブレハーンフはマルクスの草稿「資本制生産に先行する諸形態」および「ヴェーラ・ザスリッチへの書簡草稿」を知りえなかつたことは勿論、エンゲルス『家族・私有財産及び國家の起源』(一八八四年)もまだ見てゐない。かれが依拠するコヴァレンスキーの著書は、かつてかれがそれから衝擊をうけながらも反駁を試みたところの、Ковалевский, М., Общное земледелие, причины, ход и последствия его развития, ч. 1, 1879. である。前稿「ブレハーンフのロシア資本主義論(一)」第一節を参照。

- (6) Там же, стр. 270. ブレハーンフは『われわれの相違』一九〇五年版への註において「いまはすでに、わが國の共同体の國庫の起源が証明された」(Там же, стр. 270)と書き、ロシアの共同体を原始共產制の直接的遺物とみた前言を改訂している。ブレハーンフは一八八八年とくに一九〇〇年以後、ロシア社會の半アジア的性格について省察をふかめてゆき、チチーリンおよびエフイメンコ説をとりいれて、ロシアの共同体はビョートル、世の時代に國家權力が課税源確保のために農民を土地に緊縛し、分与地の定期的割替えと課税連帶責任制を導入したことによつて最終的につくり出したものであり、もともとデズボチズムの道具にすぎなかつた、という見解に變つた。バロンはこの点について興味ぶかい論究をおこなつてゐる。Baron, S.

H., Plekhanov's Russia: The Impact of the West upon an "Oriental" Society, Journal of the History of Ideas, Vol. XIX, No. 3, pp. 384-404 (Jun. 1958).

- (7) プレハーノフは『われわれの相違』初版においては、ダニエリソン論文「改革後におけるわが国の社会経済概説」（一八八〇年）を權威的労作として引用しているが、一八六一年の改革については、ダニエリソンがそれを「反資本主義的」意図にもとづくものとしているのとは異っている。他方、六一年の改革以前は現物経済が支配的であったとするプレハーノフの見解は、レーニンが改革前における商品経済化の進展を強調し「改革が第一位におしだしたのは、労働生産物の商品形態ではなくて、労働力の商品形態である」（ナロードニキ主義の経済学的内容とストルツェ氏の著書におけるその批判）『レーニン全集①』邦訳五三三頁）とするのとも異つてゐる。この点でプレハーノフはレーニンよりも、ロシアの資本主義化の程度を低くみている。
- (8) Златовратский, Н., Деревенские будни, 1880.
- (9) Орлов, Обруник статистических сведений по Московской губ., отдел хозяйственной статистики, т. IV, выпуск 1, Москва, 1879; Форма крестьянского землевладения в Москов. губ. 前者は註(5)のコヴァレフスキーの労作とともに「ナロードニキ的信条をもっていた時期のプレハーノフに衡準を与えたものである。プレハーノフはこの労作を、本書ではまったく肯定的に引用し、後段の分与地の割りかえ期限の長期化、農民層の両極分解においても引証している。
- (10) Пугачин, В. С., Сельская община, 1884. 本書も後段の分与地の割りかえ期限の長期化、買戻し操作の叙述にも利用されてゐる。ノヴォロドノフ県では分与地に対する諸掛りが分与地からの収益の一六〇—二一〇%、もっともひどいところでは五六五%に達するといふ資料がある。Доходы высочайше учрежденной комиссии для исследования нынешнего положения сельского хозяйства.
- (11) Конская перепись в 1882 г.
- (12) Григорьев, Экономико-статистическое исследование по Тамбовской губернии. «Русская Мысль» сентября 1884. 註(5)。
- (13) 註(6)のオルローフの労作に拠る。
- (14) たとえばプレハーノフの引用するヴォロンツォフの言葉——「自発的な結合としての共同体は崩壊しつつあり、行政的意味における村 objectively だけが残っている。……共同体がかつて与えた利点はすべて消え、共同体に結びついた不都合だけが残



「つづる」(Там же, стр. 257. Воронцов, Экономический упадок России. «Отеч. Записки» 1881 г. кн. 9. стр. 149)

- (13) 現実存在した、または存在しているものの一部が、もしそうでなかったとするならば、全過程はいかなる経過をたどるか  
を思惟することによって、現実を構成する諸要因の因果的連鎖を検出することは、マックス・ウェーバーが客観的可能性判断  
と名付けた方法である。フレハーノフは勿論ウェーバーのような方法的省察をもつてではないけれども、事実上ここでその  
方法を使っている。

- (14) 以上の論述の典拠は(9)(10)に挙示のものほか、Обзор материалов для изучения сельского поселения общины, 1880.  
Доклад сельскохозяйственной комиссии, прилож. 1. отъ 1. 2.

- (17) 買戻し操作の仕組みはかんたんにはつぎのとおり。改革前に地主がえていた年貢を六%で資本化したものが買戻し価格(こ  
れは当時の土地の市価を大巾に上廻った)とされ、政府は買戻し価格の八割を六%利子つきの買戻し証書によって地主に交付、  
農民は残りの二割りを支払い、政府立替えの八割を六・五%利子で四九年年賦で償却する。См. Lyashchenko, P. I., History  
of the National Economy of Russia to the 1917 Revolution, 1949, pp. 386-92. Robinson, G. T., Rural Russia under  
the old Regime, 1949, pp. 72-77, 83-91. 買戻し操作の共同体への影響についてフレハーノフの提る典拠は、(6)(10)に挙示の  
ものほか、Лычков, Л. С., Выкупная операция, как разрушить общину, «Удел» №11, 1881.

- (18) 以上「資本主義と共同体的土地所有」の章において実例として引証されている県をしらべると、ノヴゴロド、モストロフ、  
ブスコフ、カルーガ、モスクワ、ヴラジミール、オリョール、トゥーラ、リャザン、タンボフ、シンビルスク、ハリコフの  
十二県である。地図に当たってみると、それらのうち八県までがモスクワ工業地帯および中央農業地帯に属している。

〔追記〕 本稿は昭和三五年度文部省科学研究費(機関研究)による研究成果の一部である。